

帝国主義とアジアの民族運動

世界分割の進展によって列強体制は二分化し、帝国主義に圧迫されたアジア・アフリカでは広範なナショナリズム運動が台頭した。

Q▶ 帝国主義はどのような動きだろうか。また、諸地域にどのような影響をおよぼしたのだろうか。

第2次産業革命と帝国主義

Q▶ 欧米列強が植民地や勢力圏の拡大を争ったのは、なぜだろうか。

第2次産業革命

Q▶ 新しく生まれた電気・化学製品は、人々の日常生活をどのようにかえたのだろうか。

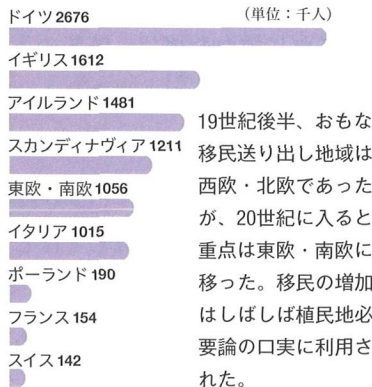
産業革命で「世界の工場」の地位についたイギリスを追って、ヨーロッパ大陸諸国やアメリカ合衆国でも産業革命が進められた。19世紀後半には、近代科学の成果にもとづく新しい工業部門が欧米で発展し、石油や電気を動力源として重化学工業・電機工業、アルミニウムなどの非鉄金属部門が成長した。またその製品は国民の日常生活に直結し、生活スタイルに大きな影響を与えた。この変化は第2次産業革命と呼ばれている。

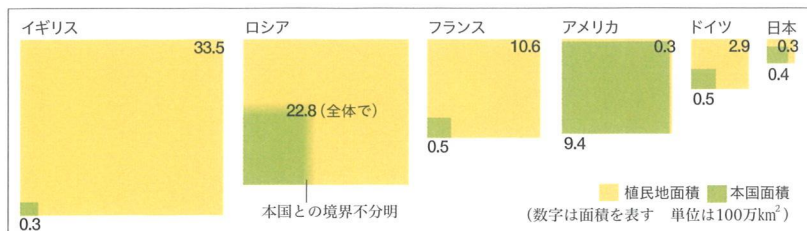
これらの工業部門は巨額の資本を必要としたため、金融資本と結び少数の巨大企業が市場を独占的に支配する傾向が現れた。また労働者は近代科学の基本的知識や専門資格を求められるようになり、これによって近代教育の普及がうながされたが、他方で伝統的技術と古い労働形態が

残る農業や中小企業は圧迫された。不況と低成長の時期が長く続いた1870年代以降、生活基盤を狭められた多くの人々が移民となつて、ヨーロッパからアメリカ合衆国などへと渡つた。



ヨーロッパからアメリカ合衆国への移民(1870～1900年) 図はニューヨークに到着した移民。





列強の海外植民地領有面積の比較(1914年)

帝国主義

Q▶ 帝国主義の支配を受けた地域において、社会や文化はどのようにかわったのだろうか。

主要国で工業化が進み、相互の競争が激しくなると、資源供給地や輸出市場として植民地の重要性が見直され、一時は植民地不要論がとねえられたイギリスを含め、各国は新たな植民地の獲得を競い合うようになった。この背景には、欧米の近代的工業力やそれに裏打ちされた軍事力の圧倒的な優位が明らかになり、非欧米地域の社会や文化を近代的発展から遅れた存在とみなす考えが広まったこともあった。1880年代以降、国家の統合力にすぐれたイギリス・フランス・ドイツなどの有力な列強は、アジア・アフリカに殺到し、現地の抵抗を武力で制圧しながら植民地や従属地域に組み込み、それぞれの勢力圏を打ち立てた。この動きが**帝国主義**であり、ここから第一次世界大戦までの時期を、帝国主義時代と呼んでいる。

帝国主義時代の植民地・従属地域の支配は、特定の産物や資源、労働力の収奪にとどまらず、当該地域の伝統文化を排除し、経済・社会構造



「白人の責務」への風刺画

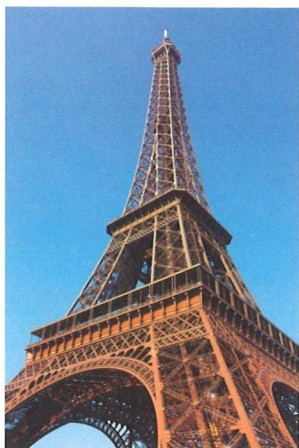
Q▶ 植民地支配は、当時の欧米社会でどのように受け取られていたのだろうか。

キプリング「白人の責務」(1899年)

白人の責務を引き受けよう
あなた方が育てた最良の者たちを送り出すのだ
あなた方の息子たちを故郷から外地へと
捕らわれの者たちの求めに応じ
狼狽している野生のままの人々のために
あなた方に新たに捕えられ、気難しい人々
半分悪魔で半分子供のような人々のために
白人の責務を引き受けよう
辛抱強くがまんして 恐怖の脅しを見せず
思い上がりを抑え 打ち解けた話かたで易しく
判るまで何度でも告げるのだ
お前たちのために努力し
お前たちの利益のためなのだ (著者訳)



キプリング(1865~1936)は、インドを舞台にした作品でイギリス初のノーベル文学賞を受賞した人物。左の詩は、アメリカのフィリピン獲得(→p.267)を激励したもの。一方、上は詩に対する風刺画で、欧米文明の優越誇示には当時から批判があった。



エッフェル塔 1889年のパリ万国博覧会のために建設された。エッフェル(1832~1923)の設計による斬新なデザインの鉄骨建築で、塔の名称も彼の名前に由来する。鉄の時代を象徴する塔は、高さ324mあり、長いあいだ世界一高い建造物であった。



1900年のパリ万国博覧会電気館 5000個の電灯に飾られた電気館は、手前の「水のシャトー」の噴水とともに、パリ万博の名物となり、同時に「電気の世紀」の開幕を告げるものとなった。

を改造させるなど、全体的かつ暴力的な性格を強めた。その結果、欧米列強の利益や価値観が一方的におしつけられ、非欧米世界の変容と「世界の一体化」の深化は急速に進んだ。

なお、この時代には、近代産業の発展と国民統合の進み方の度合いによる列強間の格差も広がった。イギリス・フランス・ドイツは列強の上位に、国内の民族問題・地域格差などに直面するロシア・オーストリア・イタリアは下位に位置づけられた。

帝国主義時代の 欧米列強の政治と社会

Q▶ 各列強は、どのような国内事情をそれぞれ抱えていたのだろうか。

19世紀末、アジア・アフリカ世界の大部分が列強の勢力圏に組み込まれるなか、後発の帝国主義国であったドイツは、自国の植民地の経済価値が乏しいことから、植民地の再配分(再分割)を要求した。さらに日本やアメリカ合衆国がそれぞれ東アジアや太平洋地域に新たな勢力圏を形成すると、イギリス・フランスなど先行する帝国主義国との緊張や対立が生まれた。ヨーロッパの列強体制はなお維持されたものの、やがて帝国主義的対立が列強間の覇権争いに発展すると、第一次世界大戦勃発の大きな要因になった。

ヨーロッパでは、19世紀末には長期の低成長期が終わり、以後好景気が持続して、のちに「ベルエポック(すばらしい時代)」と回顧される一大繁栄期に入った。列強の首都を中心に市民文化が成熟し、マス＝メディア

アの登場によって現代的な大衆文化の様相も現れた。それらは各国民のあいだにヨーロッパ近代文明への自信と近代科学の進歩への確信を広めた。



5 〈イギリス〉 19世紀半ば、イギリスは自由貿易体制を守りつつ広大な植民地帝国の維持と拡張を進めたが、その負担の大きさから、カナダなど白人植民者が多い植民地を

自治領として間接支配に切りかえた①。1870年代以降の不況・低成長や

10 ほかの工業国との競合でその優位がゆらいだイギリスは、直轄支配を続けた植民地のなかでとくに重要だったインドの支配を確実にするため、1875年に保守党のディズレーリ首相がスエズ運河会社の株を買収して運河の経営権を握り、「インドへの道」を確保した。さらに、1880年代には

※1 エジプトを支配下においた。また、ジョセフ・チェンバレン植民相はケ
→p.277 1836~1914

15 ープ植民地のローズ首相がとった拡張政策を引き継いで、南アフリカ(南ア、ブール)戦争をおこした。1910年に南アフリカ連邦を自治領に編入した。
1899~1902

国内では、フェビアン協会②や労働組合が労働者主体の政党を求めて1900年に労働代表委員会を結成し、06年には労働党となった。労働党はゆるやかな改革によって社会主義実現をめざす方針をとったため、05年に成立した自由党内閣は労働党の支援を得て社会改革に取り組み、11年に国民保険法を制定した。さらにドイツに対抗する海軍拡張費の財源を富裕者への増税に求め、保守党の強い上院がこれに抵抗すると、同年に議会法を成立させて、下院の法案決定権が上院に優先することを定めた。

また、自由党内閣は1914年にアイルランド自治法も成立させたが、イギリス系人口の多い北アイルランドは強く反対した。政府が第一次世界大戦勃発を理由に自治法実施を延期すると、アイルランド独立を求める強硬派は反発し、16年に武装蜂起したが制圧された。これをきっかけに、シン＝フェイン党③がその後の独立への動きを主導することになった。
→p.287

〈フランス〉 1880年代から、フランスは豊かな中産階層に支えられた銀行の資本力を背景に帝国主義政策に乗り出し、インドシナ・アフリカに大植民地を築いた。ビスマルク体制による国際的孤立から抜け出した90
→p.251 →p.265 →p.232

スエズ運河 スエズ運河は、10年の歳月を費やして1869年に開通した(→p.244)。これにより海路での地中海・紅海間の往来が可能となり、アフリカ南端を経由する航路に比べて距離が大幅に短縮された。運河の総延長は162km。写真は1870年のもの。

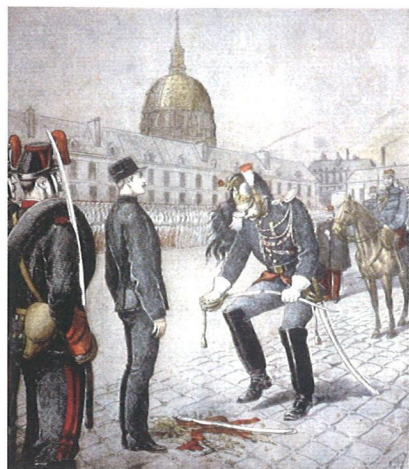
① 1867年にカナダが、20世紀初めにはオーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ連邦が自治領になった。

② 1884年創設の知識人主体の社会主義団体。その改良主義的社会主義はフェビアン社会主義と呼ばれた。

※1 1877年にヴィクトリア女王が皇帝に即位してインド帝国が成立した。→P248

③ 1905年に結成されたアイルランドの民族主義政党で、党名はゲール語で「われら自身」の意味。アイルランドの独立を主張した。

労働運動では、政党の指導ではなく、労働組合のゼネストによって一挙に社会革命の実現を目指すサンディカリズムがあらわれた。



ドレフス事件 位階剝奪式で剣を折られるドレフス(中央左)。

①元陸相ブーランジェ(1837～91)が右翼・保守勢力の支持を受けて、1889年に政権奪取をねらい失敗した事件。

②ユダヤ系陸軍中将ドレフス(1859～1935)のスパイ冤罪事件。ドイツのスパイとして流刑にされたが、作家のゾラ(→p.239)ら共和政支持派の救済運動で1906年に無罪となり、反ユダヤ主義・反共和政的傾向の軍部は信頼を失った。また、この事件に衝撃を受けたユダヤ人ジャーナリストのヘルツル(1860～1904)は、パレスチナでのユダヤ人国家の建設をめざすシオニズム運動を開始した。

③海軍の大拡張や中国での膠州湾租借(→p.270)などをおこなった。

④ボリシェヴィキ・メンシェヴィキは、ロシア語でそれぞれ多数派・少数派を意味する。前者は、党を労働者・農民の指導による革命家集団にしようとし、後者は広く大衆に基礎をおいて、ゆるやかに革命を進めようとした。

年代以降は、露仏同盟や英仏協商を結んでドイツに対抗した。

国内では、1880～90年代にブーランジェ事件^{Boulangier 1887～89}やドレフス事件^{Dreyfus 1894～99}など国論を二分する反共和政の動きがあった。しかし、

共和派政府はこれらの危機を切りぬけ、1905年に政教分離法を公布して第三共和政を安定させた。一時停滞していた労働運動も活性化し、

社会主義諸党派間の統合をめぐる論争がおこったが、1905年にフランス社会党が結成されてまとまった。

〈ドイツ〉 1888年、ドイツでは若いヴィルヘルム2世^{Wilhelm II 在位1888～1918}が即位した。新皇帝はビスマルクを引退させ、躍進した工業力を背景に積極的な政策に乗り出した。外交では、ロシアとの再保障条約を更新せず、

「世界政策」を掲げて帝国主義政策を追求した^⑤。市民層のあいだにも、国外のドイツ人を統合して大帝国建設をめざすパン＝ゲルマン主義の運動が広がり、世界政策を支援した。

内政では、皇帝は労働者層の支持を期待して社会主義者鎮圧法を廃止したが、社会民主党^⑥は勢力を広げ、1912年には帝国議会の第一党になった。社会民主党は1890年以降マルクス主義にもとづき、革命による社会主義実現を目標に掲げていたが、党内では、議会主義による社会改革となえるベルンシュタインらの修正主義が支持を広げていった。

〈ロシア〉 1890年代より、ロシアではフランスなどからの資本導入によって、都市を中心に近代産業が急速に成長した。しかし、工業や銀行の多くは外国資本が握り、工場での労働条件も劣悪であった。国内市場の狭いロシアは、シベリア鉄道などの国家事業で国内開発を進め、東アジア・中央アジアやバルカン方面への進出をはかった。

20世紀初めには、農奴解放後も地主への従属が続くことに抗議する農村部での農民運動や、工場労働者のストライキが広がった。知識人や社会主義者、さらに自由主義者からも専制体制の転換を求める声が高まり、マルクス主義を掲げるロシア社会民主労働党^⑦(創設後、レーニンらのボリシェヴィキと、プレハノフらのメンシェヴィキに分裂^⑧)や、ナロードニキの流れをくむエスエル(社会主義者・革命家党)が結成され、自由主義者もののちの立憲民主党につながる運動をおこした。

1905年、日露戦争の戦況悪化から血の日曜日事件^⑨がおこると、農民蜂



血の日曜日事件 日露戦争中の1905年1月22日(日曜日)、司祭ガボン(1870～1906)に率いられたペテルブルクの民衆は、皇帝に貧困からの救済と平和を請願しようとした。しかし宮殿の警備隊は民衆の隊列に発砲して、多数の死傷者を出したため、民衆の皇帝への信頼は大きくゆらいだ。

起・労働者のストライキ・民族運動などが全国的に発生した。モスクワにおける労働者の自治組織**ソヴィエト**(^{Soviet}評議会)の武装蜂起や黒海艦隊の反乱がおり、自由主義者も政治改革を要求した(**1905年革命**)。皇帝**ニコライ2世**(^{Nikolai II}在位1894～1917)は十月宣言を発して、立法権をもつ国会(^{Duma}ドゥーマ)の開設、市民的自由などを受け入れ、首相に工業化を推進する改革派のウィッテ(^{Vitte}1849～1915(在任1905～06))を登用した。しかし、国会の立法権は制限されるとともに、選挙制度も不平等で、皇帝は革命運動が後退すると再び専制的姿勢に戻った。

1906年、首相になった**ストルイピン**(^{Stolypin}1862～1911(在任1906～11))は、帝政の支持基盤を安定させるため、農村共同体を解体して自営農民の創出をはかった。しかし、この試みは挫折し、農村社会はかえって動揺した。政府は国民の注意をそらすため、バルカン方面への南下政策を強めた。

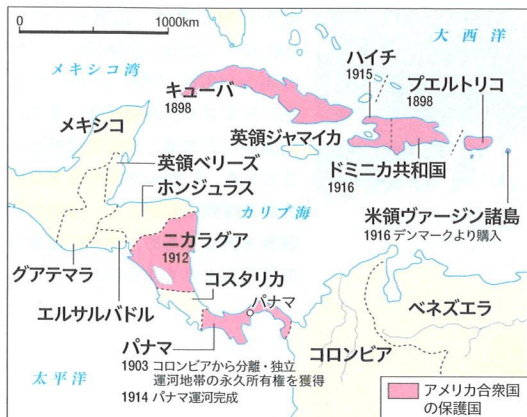
〈アメリカ〉19世紀末に世界最大の工業国になったアメリカ合衆国では、巨大企業の登場で自由競争が狭まり、また、東欧・南欧からの移民の増加によって都市部の貧困問題が表面化した。そのため20世紀初めの政府は、独占の規制や労働条件の改善など**革新主義**と呼ばれた諸改革を実施する一方、海外への進出をめざす**帝国主義的政策**にも目を向けた。共和

1890年にフロンティア消滅が宣言されると海外市場を目指すようになった。

党の**マッキンリー**(^{McKinley}1843～1901(在任1897～1901))大統領は、キューバの独立運動に乗じて1898年に**アメリカ=スペイン(米西)戦争**をひきおこした。勝利した合衆国は**フィリピン・プエルトリコ**などの**スペイン植民地**を獲得するとともに、財政・外交を制限する**プラット条項**でキューバを保護国化し、市場を拡大させた。

➡ **この時、グアムも獲得した。**

一方で海外植民地の領有には国内の批判もあり、1899年に国務長官ジョン=ヘイが中国での**門戸開放**(^{もんこかいほう})政策を提唱したように、経済進出を重視



19世紀末～20世紀初めのカリブ海地域

「棍棒外交」 図はカリブ海政策を風刺したもの。

する政策もとられたが、マッキンリーを継いだセオドア・ローズヴェルト
Theodore Roosevelt 1858～1919 (在任1901～09)
 大統領は中米諸国に干渉し(「棍棒外交」)、パナマ運河の建設など積極的
 なカリブ海政策を推進した。つぎのタフト大統領は、中国の鉄道敷設や
Taft 1857～1930 (在任1909～13)
 中米への投資による市場開拓を進めた(「ドル外交」)。

1913年に大統領になった民主党のウィルソンは、「新しい自由」を掲げ
Wilson 1856～1924 (在任1913～21)
 て、反トラスト法の強化、関税引き下げ、労働者保護立法などを実施し、
 対外政策ではアメリカ民主主義の道義的優位を説く「宣教師外交」を推
 進した。しかし一方で、内戦状態のメキシコへ軍事介入したり、14年に
 開通したパナマ運河の管理権を握るなど、中米やカリブ海域でのアメリ
 カの覇権を確立した。

国際労働運動の発展

Q 国際労働運動はなぜ再燃し、また、どのような特徴をもっていたのだろうか。

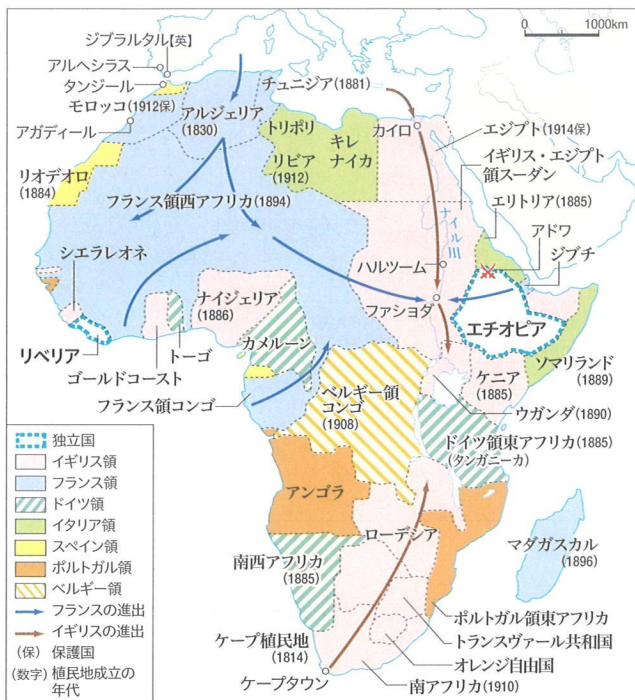
1870年代の第1インターナショナル解散後、労働運動の国際的連携は
→p.233
 停滞したが、80年代後半から欧米先進国の工業化の進展にともなって大
 衆の労働運動が活性化し、社会主義運動でもマルクス主義思想が主流に
 なって国際的連携の気運が再燃した。

1889年には、パリで各国の社会主義運動の組織が集まり、第2インター
 ナショナル(第2インター)が結成された。参加組織は国ごとに1つの
1889～1914
 政党に限定され、ドイツ社会民主党などを中心に、帝国主義や軍国主
 義への反対運動を組織し、8時間労働制などの労働条件改善を訴えた。
 しかし、社会主義者のなかにも植民地統治を認めたり、自国の利害を擁
 護する傾向が現れ、しだいに第2インターの結束も崩れはじめた。

① フランス社会党・イギリス労働党などが参加した。



アフリカ縦断政策をとるローズを描いた当時の風刺画。彼はケープ植民地の首相として拡張政策を指導した。ローデシアの名称は彼の名からつけられた。



アフリカにおける列強の植民地(20世紀初め)

列強の世界分割と列強体制の二分化

2

Q ▶ 列強による世界分割はどのように進められ、また、各地にどのような影響を与えたのだろうか。

アフリカの植民地化

Q ▶ 列強の植民地化によって、アフリカの社会や文化はどのように変容したのだろうか。

19世紀前半まで、アフリカに関するヨーロッパ人の知識は奴隷貿易の拠点や地中海沿岸、アジア航路上の港などに限られていたが、同世紀半ばには中央部の探検が進められた^②。1880年代初め、コンゴ地域をめぐるヨーロッパ諸国が対立すると、ドイツのビスマルクは調停のために

1884～85年にベルリン＝コンゴ会議を開いた。会議でベルギー国王の所有地としてコンゴ自由国の設立とアフリカの植民地化の原則^③が合意されると、列強はアフリカに殺到し、大部分を分割して植民地とした。

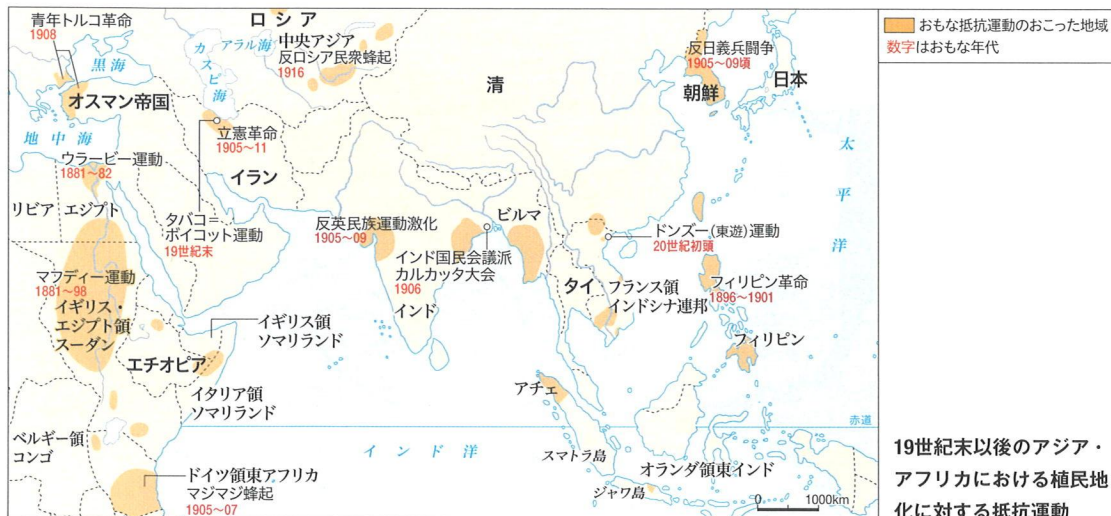
イギリスは1880年代、エジプトのウラービー運動を制圧して事実上の保護国とし、さらに南下して、スーダンではマフディー運動を制圧した。

一方アフリカ南部では、ケープ植民地のローズの指導で周辺地域への侵略政策がとられた。1899年にイギリスは、ブル人^④のトランスヴァール共

② 19世紀半ば、リヴィングストンやスタンリーの中央アフリカ探検(→p.240)により、現地の事情が明らかになった。

③ ある地域を植民地とする場合、その地域でのヨーロッパ人の安全や商業活動を保証する(実効支配)という原則と、沿岸地域の植民地は後背地も保有する(境界画定)という原則。

④ ブール人はケープ植民地のオランダ人の子孫で、ケープ植民地がイギリス領になると、北部に移動してトランスヴァール共和国とオレンジ自由国を建てた。両国で豊富なダイヤモンドと金が発見されて、ローズらに注目された。



①これによってイギリスは、カイロとケープタウンをつなぎ、インドのカルカッタと結ぶ3C政策を実現した。

和国・オレンジ自由国とのあいだに南アフリカ戦争をおこし、激しい抵抗を排して、両国を併合した①。

フランスは、1881年にチュニジアを保護国とし、サハラ砂漠地域からアフリカを横断してジブチ・マダガスカル方面との連結をめざした。この計画はイギリスの縦断政策と衝突して1898年にファショダ事件をおこしたが、フランスが譲歩して解決した。その後、両国は接近して1904年に英仏協定を結び、エジプトにおけるイギリスの支配的地位とモロッコでのフランスの優越的地位を認めあい、ドイツに対抗するようになった。

横断政策

②アメリカ合衆国の解放奴隷を入植させて建国した国家。

ドイツのアフリカ植民地は有力な資源や市場価値に乏しかったため、ドイツは新たな植民地を求めて、フランスのモロッコ支配に挑戦し、1905年と11年の2度にわたってモロッコ事件をおこした。これはいずれもイギリスなどほかの列強の反対にあい、モロッコは12年にフランスの保護国になった。イタリアは1880年代にソマリランド・エリトリアを植民地とし、さらにエチオピアに侵攻したが、1896年のアドワの戦いで敗

アドワの戦い イタリアの侵攻に対して、エチオピアはフランスからの支援を受けつつゲリラ戦で対抗し、1896年にはエチオピア北部のアドワでイタリア軍(右)を破った。



れて後退した。その後、1911~12年にイタリア=トルコ戦争をおこしてオスマン帝国からリビア(トリポリ・キレナイカ)を奪った。

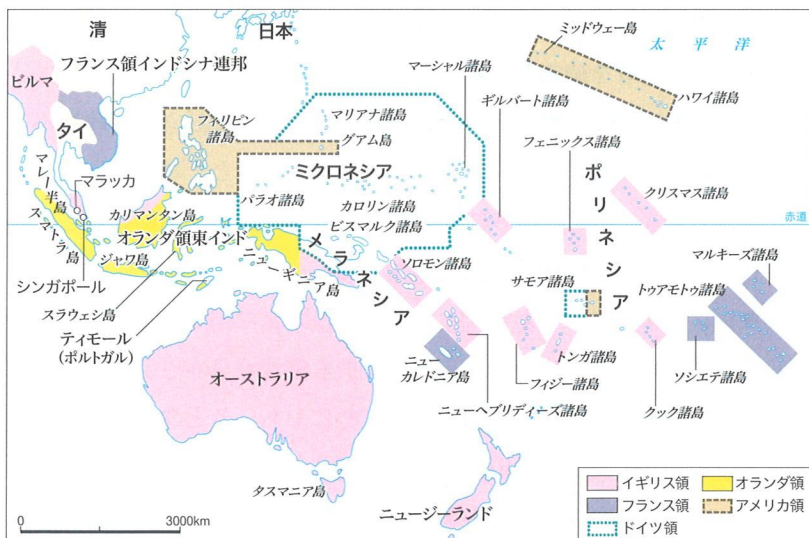
20世紀初めには、アフリカ全土は、エチオピア帝国とリベリア共和国を除いて、列強の支配下に

おかれた。列強は現地の住民のつながりや交易網^{こうえきもう}を無視し、経済的利益や戦略的重要性から現地に行政・治安機構^{ちあん}を整え、沿岸部から後背地^{こうはいち}を含む人為的な境界線^{じん い きょうがいせん}を定めた。アフリカの国家に多い直線に引かれた国境線はその結果である。また、住民をプランテーションや鉱山^{こうざん}の過酷な労働に従事させるなど、その支配はアフリカの発展にはかりしれない被害と障害を残した。現地の人々は地域や固有の文化を守ろうと抵抗を続けたが、こうした抵抗運動はやがて民族主義運動に成長して、20世紀の歴史を形成する大きな流れになった。

太平洋地域の分割

Q 列強による太平洋地域の植民地化は、どのように進められたのだろうか。

太平洋地域には、18世紀にイギリスが、19世紀にはフランス・ドイツ・アメリカ合衆国が進出した。オーストラリアはイギリス領となり、最初は流刑植民地だったが、19世紀半ばに金鉱が発見されると移民も増加して発展し、先住民の**アボリジニー**は奥地に追われた。イギリスはさらにニュージーランドなども領有したが、その際も先住民の**マオリ人**の抵抗を武力でおさえ込んだ。ドイツはビスマルク諸島などメラネシアの一部とミクロネシアの諸島を獲得し、アメリカ合衆国は1898年の**アメリカ＝スペイン戦争**の結果、スペインからフィリピン・グアムを獲得したほか、同年にハワイを併合した。



太平洋における列強の勢力圏(20世紀初め)



ハワイ最後の女王リリウオカラニ(在位1891～93) ハワイ王国は1840年来、立憲王政であったが、93年アメリカ合衆国の圧力でリリウオカラニ女王は退位させられ、98年に併合された。

ラテンアメリカ諸 国の従属と発展

Q 独立後のブラジル・アルゼンチン・メキシコがたどった道の共通点と差異は、どのようなものだろうか。

①中南米地域は、19世紀半ばよりラテンアメリカとも呼ばれるようになった。

中南米のラテンアメリカ諸国①では、独立後も植民地期以来の大土地所有者や大商人が実権を握り、貧富の大きな格差が存続していた。加えて、国民の出自は多様で地域差も大きかったため、その統合は容易ではなかった。宗教面では、ほとんどの国でカトリック教会が影響力を維持したが、政教分離を進めようとする自由主義者との対立がみられた。また、中央政府に対して地方有力者が反乱をおこしたり、軍人がクーデタを試みるなど、不安定な政治が続いた。

経済的には、19世紀末になると、欧米諸国での第2次産業革命の進展や食料需要の高まり、ラテンアメリカ諸国での鉄道・汽船の普及、冷凍技術の発達などの結果、農産物や原料の対欧米輸出が増加した②。その一方で欧米からの工業製品の輸入や投資も盛んであり、中米ではアメリカ合衆国の、南米ではイギリスの経済的影響が大きかった。なかでも合衆国は、1889年以降**パン＝アメリカ会議**を定期的に開催して、ラテンアメリカへの影響力を強めていった。

②アルゼンチンの牛肉、ブラジルのコーヒー、キューバの砂糖、チリの硝石(火薬の原料)などがあげられる。

ブラジルでは、帝政下で奴隷制が維持されたが、イギリスの圧力による奴隷貿易の廃止や、アメリカ合衆国での奴隷制廃止を経て、1888年に廃止が決定された③。しかし、この措置は経済を混乱させて地主層の離反をまねき、これに乗じた共和派は翌89年に軍の一部を動かし、クーデタによって共和政を確立した④。

③1886年にキューバでも奴隷制が完全廃止されており、ブラジルでの廃止の結果、南北アメリカで奴隷制は消滅した。

④1891年の憲法でブラジルは連邦共和国となったが、同国では軍がその後も政治的発言力をもつことになった。

アルゼンチンでは、独立後に中央政府と地方勢力が対立して政情不安が続いたが、19世紀末に安定した政権が樹立されると、移民の流入や投資が急増した⑤。20世紀初めには世界有数の農産物輸出国に成長したが、民主化の遅れなどの政治的課題も残された。

⑤移民の招致は憲法で規定されており、20世紀初めのアルゼンチンでは、全人口の30%が外国生まれとなった。

メキシコでは、アメリカ＝メキシコ戦争の敗北で国土が半減した衝撃で政治改革が始まり、1857年に自由主義的な憲法が公布されたが、保守派の反乱で内戦が始まった。保守派は劣勢におちいるとフランスに介入を求め、**ナポレオン3世**は61年に軍を派遣して、64年には帝政を樹立させたが、アメリカの介入などもあって67年に撤退し、共和政が復活した⑥。

その後、**ディアス**大統領による長期の独裁的な政治体制のもと、豊富

自由党の**ファレス**政権によって
教会の土地所有を禁止する改革
などがすすんだ。

な鉱物資源を背景に経済成長がはかられたが、経済格差も強まった。1910年には国内各地で農民も加わった蜂起がおこってメキシコ革命が始まり、ディアス政権は倒されたが、新体制をめぐって内戦となった。アメリカ合衆国の介入もあって情勢は混乱したが、結局、17年に新憲法が定められ、大統領の権限が強化される一方で、外国資本と教会財産が国有化された^⑥。



メキシコ革命 1914年12月、革命軍を率いて首都を占領し、大統領官邸に入った革命指導者サバタ(1879~1919、右)とビリャ(1878~1923、左)。ビリャは農民運動指導者でもあった。両者はいずれものちに暗殺された。

^⑥その後、メキシコでは農民に土地が分配され、植民地期以来の大土地所有制(→p.161)が解体された。

^⑦これによってドイツは、ベルリン・ビザンティウム(イスタンブル)・バグダードを連結する**3B政策**を進めた。

イギリスの**3C政策**に対抗した。

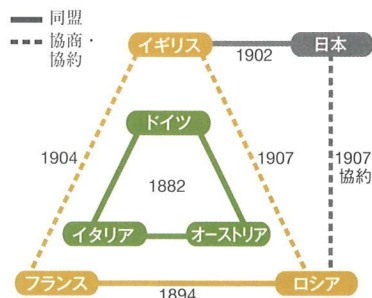
列強体制の二分化

Q 列強体制の枠組みは、どのようにかわっていったのだろうか。

ヴィルヘルム2世のもとで、ドイツはロシアとの**再保障条約更新**を見送り、海外進出に乗り出した。そのためロシアはフランスに接近して、1890年代前半に**露仏同盟**を結んだ。これによってビスマルク体制は崩れ、列強関係は流動化した。ドイツは**バグダード**鉄道敷設を推進するとともに^⑦、海軍拡張政策によってイギリスの覇権に挑戦した。20世紀に入ると、両国の建艦競争は激しさを増していった。

イギリスはどの国とも同盟関係をもたない「**光荣ある孤立**」の立場をとっていたが、東アジアでのロシアの進出に備えて1902年に日本と**日英同盟**を結び、また、ドイツを警戒して04年にはフランスとの**英仏協商**を成立させた。ロシアは日露戦争に敗北すると、進出方向を東アジアからバルカン方面に転換し、ドイツやオーストリア、オスマン帝国と対立するようになった。そのため、1907年に**英露協商**を結んでイギリスと和解した。このイギリス・フランス・ロシアの提携関係は**三国協商**と呼ばれ、それぞれの植民地や勢力圏の現状維持をはかるものであったが、それはやがてドイツを共通の脅威とする連携になった。

イタリアは**三国同盟**の一員であったが、「**未回収のイタリア**」をめぐってオーストリアとの対立を深め、フランスに接近したので、三国同盟の実態はドイツ・オーストリアの二国同盟になり、ドイツはオーストリアの地位の維持と安定を重視するようになった。同盟関係の変化と英独対立によって、列強体制はドイツとイギリスをそれぞれの中心とする2つの陣営に分裂し、1910年以降たがいに軍備拡大を競いあった。



第一次世界大戦前の同盟・協商関係

アジア諸国の変革と民族運動

3

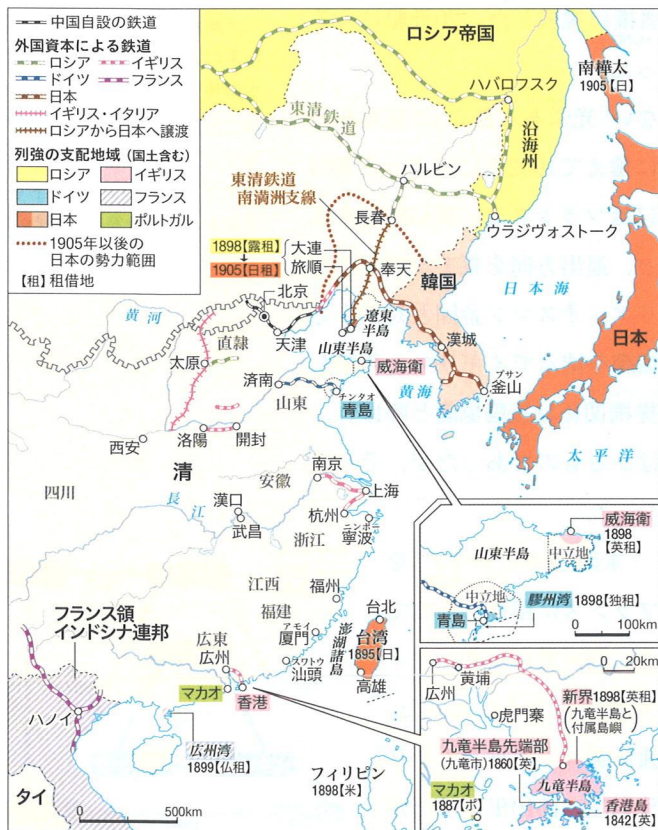
Q アジア諸国の変革や民族運動は、何が原因で、またどのような結果をもたらしたのだろうか。

列強の中国進出と清朝

Q 日清戦争は、中国にどのような影響を与えたのだろうか。

① 勢力範囲は租借地や獲得した利権を中心に設定された。大半の勢力範囲に実効性はなく、名目的なものであったが、中国の知識人に中国分割という危機感を与えた。

日清戦争で同じ東アジアの日本に敗北したことは、中国の知識人に大きな衝撃を与え、清朝の伝統的な内政・制度を変革する「**変法**」の考え方が広まった。その中心となった**康有為**は、日本やロシアにならった政治体制の改革をとねえ、**梁啓超**らはその宣伝につとめた。光緒帝の支持のもとで、1898年に康有為らは憲法制定や議会開設などの改革を試みたが（**戊戌の変法**）、急激な改革は官僚の反対で実施されなかった。同年、光緒帝が実権を西太后から奪おうとしたのに対して、西太后が先手を打



東アジアにおける列強の進出

てクーデタをおこし、光緒帝は幽閉され、康有為・梁啓超らは日本に亡命して改革は失敗に終わった（**戊戌の政変**）。

同じ頃、清の弱体化に乗じて列強は中国への進出を開始し、1896年にロシアが**東清鉄道の敷設権**を獲得した。さらに98年にドイツが**膠州湾**を租借したのを契機に、ロシアは三国干渉で返還された遼東半島のうち**旅順・大連**を、イギリスは**威海衛**と**九竜半島**（新界）を、99年にはフランスが**広州湾**を租借した。日清戦争の賠償金もあって財政難となった清に対する借款提供の担保として、列強は**鉱山・鉄道の利権**なども獲得し、勢力範囲を設定した①。アメリカ＝スペイン戦争でフィリピンを獲得したアメリカ合衆国は、中国進出に遅れたため、国務長官**ジョン＝ヘイ**の

下関条約で日本が遼東半島を獲得すると、ロシアは三国干渉により、日本に圧力をかけて清に返還させ、その代償として清からこの権利を得た。

梁啓超「中国積弱の根源について」(『清議報』1901年4～7月掲載)

中国人の脳裡にある理想は、立派で尊ぶべきものもともより少なくないが、改むべきものもまたたいへん多い。西洋や日本では、中国人は愛国心が無い、としばしばいわれる。私はもとよりこのことばを甘受する者ではないが、要するにわが国民の愛国心が西洋や日本にくらべて薄弱なのは、まぎれもない事実である。愛国心の薄弱なことこそ、わが国の積弱の最大の根源にほかならない。私はかつて思考の及ぶかぎり、愛国心の薄弱な理由を研究し、その源は理想の誤りから発しているという結論をえた。その誤りは次の三点である。

- (一) 国家と天下の区別を知らないこと。中国人はこれまで自分の国が国であることを知らなかった。……
- (二) 国家と朝廷の区別を知らないこと。我が中国には奇異なことが一つある。それは、数億の人間が数千年にわたって国を建てていながら、今日まで国名がないことである。……
- (三) 国家と国民の関係を知らないこと。国というものは民を集めてつくられている。国家の主人はだれかといえば、その国の国民にほかならない。……

(村田雄二郎責任編集『新編 原典中国近代思想史2』)

名で中国の門戸開放・機会均等および領土保全を提唱した。こうした列強の進出は、中国の知識人に大きな危機感をいだかせた。なかでも梁啓超は、社会進化論^②や日本のナショナリズムの影響を受けつつ、列強の進出を「中国分割の危機」であると訴え、明や清といった王朝名ではなく、国家の名称としての「中国」を創出し、中国ナショナリズムの誕生に貢献した。

列強の進出にともなってキリスト教の布教活動が盛になると、宣教師の保護を求めてキリスト教に改宗する中国人も増加した。これに既存の秩序を維持しようとする地域エリートが対抗し、中国各地で反キリスト教運動による衝突事件(教案)が生じた。山東半島で結成された自衛組織の1つである義和団は、鉄道施設やキリスト教会を破壊し、宣教師や中国人信徒を襲撃しつつ勢力を拡大した。1900年、義和団が北京に入ると、清朝保守派はこれと結んで列強に對して宣戦を布告した。列強は在留外国人保護のために共同出兵し、日本とロシアを主力とする8カ国連合軍が北京を占領して、在留外国人を救出した(義和団戦争)。翌01年に結ばれた北京議定書で、敗北した清は当時の財政収入の4倍以上の4億5千万両という膨大な賠償金を支払うことや、北京付近への外国軍隊の駐屯などを列強に認めることとなった。

Q▶ 梁啓超は中国の弱体化についてどこに原因があると考えていたのだろうか。



義和団 義和団は「扶清滅洋」をとらえて勢力を広げた。その団員は拳法を習得し、伝統的な矛などの武器で武装していた。

②ダーウィン(→p.240)の進化論からヒントを得て、人間社会の進化を説明しようとする議論。様々な説のなかで、当時の中国に大きな影響を与えたのは「適者生存」(進歩に適応した者のみが生存競争において生き残る)という考え方であった。

日露戦争と韓国併合

Q▶ 日露戦争は、東アジアにどのような影響をもたらしたのだろうか。

日清戦争後、朝鮮は1897年に国号を大韓帝国と改めて、独立国であることを示したが、日本とロシアがその支配権をめぐる争った。義和団



戦争に際してロシア軍は中国東北地方を占領し、
撤退を求める日本との対立は激化した。同じ時期、
イギリスは南下をもくろむロシアと中央アジアな
どをめぐって対立していたが、南アフリカ戦争で
余裕がなくなっていたため、1902年に日本と日英

同盟を結び、アメリカ合衆国も日本を支援した。

韓国の義兵闘争 19世紀末から、地方のエリートを指導者とする民衆によって抗日闘争がおこなわれ、1907年以降は解散された軍隊の兵士が加わって闘争が激化した。

その後も朝鮮・中国東北地方をめぐる日露両国の対立は解消せず、日本は開戦を決意して04年に日露戦争が始まった。日本軍は陸上では苦戦しながらも旅順や奉天を占領し、海上では日本海海戦で勝利したが、国力は限界に達していた。ロシアも国内で1905年革命が勃発して社会不安が高まっていた。そこで合衆国のセオドア・ローズヴェルト大統領の仲介によって05年にポーツマス条約が締結され、日本は韓国の指導・監督権、遼東半島南部の租借権と東清鉄道南部の利権、樺太(サハリン)南部の領有権を獲得した①。

①また1905年には、他国の領有権が主張されていないことを確認のうえ、竹島が日本の領土に編入された。

②日露戦争で得た東清鉄道支線の長春・旅順口間の利権をもとに設立された。

ヨーロッパの大国ロシアに対する日本の勝利は、アジア諸国の民族運動に影響を与えた。しかしその後、日本は1906年に南満洲鉄道株式会社を設立し、中国東北地方への経済進出を推進した。さらに日英同盟に加えて、07年には日露協約を結んで、韓国における優位を列強に認められた。

③第2次日韓協約(1905年)にもとづいて設けられた統監は、日本政府を代表してソウルに常駐し、韓国の外交を監督した。日本の朝鮮支配を推し進めた初代韓国統監の伊藤博文(1841～1909)は、1909年にハルビンで安重根(1879～1910)に暗殺された。

④日本は土地調査事業によって土地所有権を確定して安定した税収を確保するとともに、品種改良による米の増産を進め、鉄道・道路などのインフラや近代的教育制度を整備した。一方で軍隊・憲兵・警察により民族運動をきびしく弾圧した。

朝鮮半島では、日本は日露戦争開始以降、3次にわたる日韓協約を結ぶなかで統監府を設置して韓国を保護国化し、支配を強めた。これに對して韓国は、皇帝の高宗がハーグの万国平和会議に密使を送って国際世論に訴えたがかえりみられず、武装抗日闘争(義兵闘争)をおこなって抵抗したが、日本軍に鎮圧された。日本は朝鮮支配に対する列強の黙認のもと、1910年に韓国を併合し、植民地とした。日本は朝鮮総督府をソウル(京城)におき、憲兵を利用した強権的な支配(武断政治)のもと、近代化政策を推し進めていった②。

1880年代から、日本では製糸業や綿紡績業などの工業化が進展し、欧米への生糸の輸出が日本経済を支えたほか、中国からの綿花輸入と中国への綿糸輸出も増大した。日清戦争後、日本は金本位制を導入して通貨を安定させ、製鉄業などの重工業も発展した。日露戦争後には、中国東

北地方の大豆や朝鮮の米、台湾の米・砂糖を輸入して、中国東北地方や朝鮮に綿布を輸出するなど、日本と東アジアとの経済関係はいつそう深まっていた。

清朝の改革と 辛亥革命

❶ 改革をおこなったにもかかわらず、清朝が倒れたのはなぜだろうか。

義和団戦争に敗北した清朝では、保守的な勢力が後退し、新たな改革によって中央集権国家の確立がめざされた。

これを光緒新政という。清朝は官庁を再編したほか、1905年に科挙を廃止して新たな学校制度の整備を始め、

また安価で文化も近いと考えられた日本への留学生が激増した。

軍事面でも近代化した新軍を編制したが、そのうち最強の北洋軍は、袁世凱が掌握した。外国企業に対抗するために実業振興も進められ、勃興しつつあった民間の中国企業をあと押しした。

さらに、08年に清朝は国会開設を公約して立憲体制の整備を進め、憲法の雛型である憲法大綱を定めるとともに、国会や地方議会の前身を設置した。

この間、海外の留学生や華人のなかには清朝に対する革命運動に参加するものも増え、日本では、孫文らが分散していた革命諸団体⑤を結集し、1905年に東京で中国同盟会を結成した。同盟会は三民主義⑥を掲げて宣伝活動をおこない、梁啓超ら立憲派と激しく議論をかわしたが、中国南部を中心とする武装蜂起は失敗し、革命派の結束も弱まっていた。

清朝は義和団戦争の賠償金もあって財政難に苦しみ、改革の経費を捻出するために増税をおこなわざるをえず、民衆の反発は高まった。また、立憲体制の整備が遅れたうえ、憲法大綱も中央政府の権限を強めるものであったため、地方有力者を中心とする立憲派の不満も高まった。こうしたなか、全国的な鉄道整備を進める清朝は、幹線鉄道を国有化し、外国からの借款を得て鉄道を建設しようとした。しかし、これは外国から鉄道利権を回収して民営の鉄道建設に投資していた地方有力者の反発をまねき、1911年9月に四川で暴動が発生した。この暴動を契機に10月には武昌で新軍のなかの革命派が蜂起して辛亥革命が勃発し、これに中・南部の諸省が応じて、清朝からの独立を宣言した。独立した諸省の代表



孫文(右端)と日本の友人たち
広東の貧しい農家の生まれである孫文は、ハワイにいた兄のもとで教会の学校に入り、のちにキリスト教の洗礼を受け、医学を学び医者を開業した。1894年にハワイで興中会を結成して以降、30年にわたり革命運動を推進した。亡命などで海外に滞在していた期間も長く、海外華人のあいだに革命思想を広めるとともに、日本や欧米でも多くの友人・支援者を獲得した。

⑤ 孫文が1894年にハワイで結成した広東人中心の興中会など、諸団体が存在した。

⑥ 清朝の打倒と民族の独立をめざす民族主義、憲法にもとづく共和国建設をめざす民権主義、経済的な不平等の改善を内容とする民生主義からなった。

は亡命先から帰国した孫文を臨時大總統に選び、孫文は12年1月に南京で**中華民国**の成立を宣言した。

清朝は、北洋軍を握る袁世凱を起用して革命の鎮圧をはかったが、袁は列強の支持を得つつ革命勢力と取引して、清朝皇帝の退位と共和政維持を条件に、孫文から臨時大總統の地位をゆずり受けた。1912年2月に袁は宣統帝(溥儀)を退位させて清朝を滅亡に追い込み、北京で臨時大總統となって中国の実権を握った。しかし、自らの権限を強めて議会をおさえようとしたため、孫文らの国民党と対立した。孫文らの武装蜂起(第二革命)が失敗すると、正式に大總統に就任した袁の独裁は進み、16年には皇帝に即位しようとしたが、国民党系の地方軍人がおこした**第三革命**や列強の反対で失敗した。袁は同年失意のうちに病死し、その後は部下の軍人たちが各地に割拠して、近代化事業を進めつつたがい争う不安定な状況が続いた。

中華民国は、清朝の領有していた地域をその領土としたが、辛亥革命を契機に周辺部でも独立の動きがおこり、1911年に外モンゴルが独立を宣言し、13年にはチベットでダライ・ラマ13世が独立を宣言した。その後、外モンゴルでは24年にソヴィエト連邦の影響下でモンゴル人民共和国が成立したが、そのほかの地域は中華民国のなかにとどまった。しかし、チベットは自立の動きを強めたうえ、新疆・内モンゴルでは住民の民族運動や軍事勢力の割拠、外国の干渉もあったため、中華民国への統合は強固なものではなかった。

インドにおける民族運動の形成

▶ インドにおける民族運動は、どのような社会背景のもとに生まれたのだろうか。

インド帝国の成立以後、イギリスは港と内陸を結ぶ鉄道の建設を本格的に進め、インドとヨーロッパをつなぐ電信網を整備した。また、プランテーションにおける世界市場向けのコーヒーや茶などの生産や、綿花などの工業原料作物の生産も広がり、インドはイギリスを中心とした世界的な経済体制のなかに組み込まれていった。

これらの経済発展は、イギリスの利害にあわせて進められたため、インドの人々に重い負担をもたらした。しかし、本国費と呼ばれるイギリスへの財政負担が増える一方で、インドでは開墾による耕地の拡大や

① 中国同盟会を前身とする政
党。1913年に解散させられ
ると、孫文らは秘密結社の中華
革命党を結成し、19年にこれ
を改組して大衆政党の中国国
民党とした。

② モンゴル人民党は、ソヴィ
エト政府の赤軍の援助を得て、
1921年に中華民国の影響力を
排して独立を達成し、24年に
人民共和国の成立を宣言した。
当時は、ソ連以外で唯一の社
会主義国であった。

③ インドの鉄道建設は、軍事
目的の場合も多く、採算を度
外視して19世紀後半に急速な
勢いで進められた。

④ 南インドではコーヒーが、
インド東北部のアッサム地方
やセイロン島などでは茶が栽
培された。

⑤ インド政庁は、インドの鉄
道建設に対する利子保証分の
費用のほか、インド内外でイ
ギリス帝国の防衛に従事する
インド軍の維持経費やイギリ
ス本国でのインド支配に関わ
る行政経費などを、本国に対
して負担した。



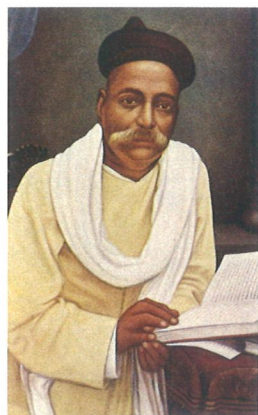
かんがい き ばん ぼうせき
灌漑基盤の整備が進み、さらに紡績業においては、インド人資本による工場制綿工業の発展もみられた。

そのなかで、弁護士や技術者・官僚などのエリート層を中心に、イギリス人とのあいだの人種差別⑥を経験することにより、民族的な自覚をもつ階層が出現した。インド大反乱を経験したイギリス側にも、インド人エリートを植民地支配の協力者として利用しようという発想が生まれた。その結果、インド人の意見を諮問する機関として、1885年に**インド国民会議**が結成された。

国民会議は、当初は穏健な組織であったが、しだいに民族運動の中心となっていく。イギリスは、ヒンドゥーとイスラームの両教徒を反目させて運動を分断することを意図して、1905年に、ベンガル州を両教徒がそれぞれ多数を占める東西2つの地域にわけ**る** **ベンガル分割令**を発表した。これに対して、国民会議では、穏健派にかわって**ティラク**らの急進派が主導権を握り、分割反対運動を展開した。1906年に**カルカッタ**で開かれた**大会**では、英貨排斥・**スワデーシ**(国産品愛用)・**スワラージ**(自治獲得)・民族教育の4綱領を決議して、植民地支配に真正面から対抗する姿勢を示し、国民会議は政治組織の**国民会議派**へと変貌した。一方、イスラーム教徒は、ベンガル分割令によって多数派の州が誕生する利点を説くインド総督の影響もあって、国民会議とは別に、同年に親英的な**全インド=ムスリム連盟**を結成した。

ベンガル分割令によって急進化した民族運動を鎮静するため、イギリスは、懐柔策として一部のインド人を行政組織に参加させた。さらに、1911年にはベンガル分割令を撤回する一方、首都を反英運動の中心であった**カルカッタ**から**デリー**に移した。その結果、民族運動は一時的に停滞することとなった⑦。

インド国民会議創立大会 インド人のなかの知識層・商人・地主などを主体に発足した。



ティラク みずから発行する新聞で激しい植民地支配批判を展開して投獄された。出獄後、自治はだれもが当たり前にもっている権利であるとなえ、民族運動の急進化を進めた。

⑥たとえば、判事の権限についても差別があり、インド人判事がヨーロッパ人刑事犯を審理できるとする1883年に提出された法案は、インド在住のヨーロッパ人による激しい反対で、有名無実化されて可決された。

⑦この時期の民族運動は、知識人を中心として民衆とはかけ離れた根の浅い運動であったことが、停滞の大きな要因であった。

東南アジアにおける 民族運動の形成

▶ 東南アジア各地の民族運動には、一般的にどのような傾向があったのだろうか。

東南アジアでは、タイを除くすべての地域が植民地支配下にあった。
いづれの地域でも、植民地支配に抵抗する運動がみられたが、多くは弾
圧を受けて挫折していった。

インドネシアに関して、オランダ本国では、インドネシア社会の窮乏
に批判的な世論が形成され、強制栽培制度の廃止など、植民地政策の根
本の見直しが始務となった。その結果、20世紀初めに「倫理政策」と呼ば
れる新たな政策が開始され、キリスト教の布教や住民への福祉、現地へ
の権力の委譲がうたわれた。その一環として、現地人官吏養成のための
学校が多く設立され、現地有力者の子弟を中心に、オランダ語の教育や
専門教育がほどこされた。そして、それらの教育を受けた知識人のあい
だに、しだいに民族的な自覚が生まれていった。

また、1911～12年にかけて、現地のムスリム知識人により**イスラーム
同盟** (Sarekat Islam) が結成された。同盟は当初、現地人の相互
扶助団体だったが、しだいに政治活動を活発化させ、1918～20年の民族
運動の高揚期には中心的役割を果たしたが、植民地政府の弾圧で組織は
崩壊した。

フィリピンでは、フィリピンやスペインで高等教育を受けたフィリピン
人が、19世紀後半から、スペイン支配を批判して民衆の啓蒙活動を開始
した。1880年代に入ると、**ホセ・リサル** (José Rizal) らが民族意識をめざめさせ
る言論活動を開始し、1896年にはフィリピン革命が始まった。98年にア
メリカ＝スペイン戦争が勃発すると、**アギナルド** (Aguinaldo) を中心とする革命軍は、
スペインの植民地支配からの解放を進め、99年1月にフィリピン共和国
を樹立した。しかしアメリカ＝スペイン戦争後、スペインとの条約によ
って領有権を得た**アメリカ合衆国**が同年2月にフィリピンへ侵攻し、フ
ィリピン＝アメリカ戦争が勃発した。フィリピン共和国側は敗れ、**合衆
国**は1902年から本格的な植民地統治を開始したが、その後も、ムスリム
を中心に各地で抵抗が続いた。

ベトナムでは、**ファン・ボイ・チャウ** (Phan Boi Chau) を中心に、フランスからの独立
と立憲君主制の樹立をめざす運動が組織され(1904年)、その後この組織



ホセ・リサル スペインの
大学に留学したリサルは、
小説『われにふれるな』を書い
て植民地統治を批判し、帰国
後、言論活動と政治活動を展
開したが、最後は処刑された。



ファン・ボイ・チャウ 軍事
支援を求めて来日したが、フ
ランスの圧力で国外退去とな
った。辛亥革命後、中国に渡
ってベトナム光復会を結成し
て運動を続けたが、投獄され、
出獄後は社会主義に接近して
いった。

は**維新会**と呼ばれるようになった。また、明治維新後に急速に近代化し、日露戦争に勝利するなど強国化を果たしつつあった日本の姿に鼓舞されて、日本から軍事援助を得ようとする活動や、日本へ留学生を送って新しい学問や技術を学ばせようとする**ドンズ**(東遊)運動も組織された。

しかし、日本への留学生は、フランスとの提携を重視した日本政府によって国外退去となった。その後、独立運動は、中国の辛亥革命から刺激を受けて1912年に広州で組織されたベトナム光復会に引き継がれた。

西アジアの民族運動と立憲運動

Q 西アジアにおける様々な民族運動には、どのような共通点がみられるだろうか。

ヨーロッパ列強の進出と支配は、西アジアでも抵抗と変革を呼びおこした。なかでも**アフガニー**は、帝国主義とイスラーム諸国での専制をともに批判し、エジプトやイランなどの民族運動に大きな影響を与えた。

エジプトでは、イギリス・フランスの支配に抵抗して、1881年に軍人のウラービーが「エジプト人のためのエジプト」となえて立憲制の樹立と議会の開設を求め、これは国民的な運動に発展した(**ウラービー運動**)。しかし、イギリスは軍事力によって運動を鎮圧し、エジプトを事実上の保護国とした。南のスーダンでは、ムハンマド＝アフマドが81年に反乱をおこし、ゴードン総督を敗死させてハルツームを中心に国家を築いたが、98年にはイギリス軍の攻撃で崩壊した(**マフディー運動**)。

イランでは、政府がイギリスの会社にタバコの独占利権を譲渡したことに反対して、19世紀末に国民的な**タバコ＝ボイコット運動**がおり、政府は利権の譲渡を撤回した。これを機にイラン人の民族意識が高まり、政府の専制を批判する立憲運動へと発展した。1906年に最初の国民議会が開かれ、翌年には憲法が公布された(**立憲革命**)が、**英露協商**でイラン北部を勢力圏としたロシアの軍事介入によって、革命は挫折した。

オスマン帝国でも、**アブデュルハミト2世**の専制に反対する知識人や将校(**青年トルコ人**)が、1908年に政府にせまって議会と憲法を復活させた(**青年トルコ革命**)。新体制への期待は高かったが、イタリア＝トルコ戦争やバルカン戦争のなかで政権は安定しなかった。こうしたなか、新聞・雑誌などの言論や結社の活動によってトルコ民族主義が生まれ、それは帝国内のアラブ民族主義にも刺激を与えることになった。



アフガニー 彼はイランの出身で、西アジア各地のほか、インド・ヨーロッパ・ロシアでも活動し、ムスリムに覚醒と連帯(**パン＝イスラーム主義**)を説いた。



ウラービー 農民出身の陸軍大佐。運動鎮圧後にセイロン島への流刑とされた。流刑中に彼と面会した日本の東海散士は、「佳人之奇遇」でエジプトへの共感を記している。

①ムハンマド＝アフマドはみずからマフディー(救世主)と称し、独自の教説によって支持を広げ、反エジプト・反イギリス闘争を指導した。

②国民を統合するにはオスマン主義(→p.244)やパン＝イスラーム主義では不十分であり、民族意識にめざめたトルコ人が主体となって国を支えるべきとする考え方。その背景には、中央ユーラシアから西アジアに至るトルコ人の歴史の解明が進んだこともあった。

※1 スルタンの専制政治に反対する「統一と進歩団」を結成した。

その後内外の情勢の変化に伴って、内閣は反動化し、やがて内閣はドイツに接近するようになった。